

をなし、其の永久に監視を受けたるはこの古切支丹類族書上の斷簡によりて知り得べし。今この斷簡を見、嚴教の魔の手は東北地方にも容赦なく伸びたるに驚き、大逆罪を犯したる者の如き監視を

受けたる其の子孫の如何に慘苦なりしかを追想して多大の同情を禁する能はず、こゝに膽澤郡古切支丹類族書上の斷簡を紹介して當時を偲ぶ資に供すと云爾。

埃及旅行記(上)

文學博士 松本文三郎

一、埃及の入國

大正八年七月十五日神戸解纜の郵船佐渡丸は、途中幸にして甚だしきタイフーンやモンsoonにも遭遇せず、約四十日の航海の後、八月廿三日を以て悠々としてポートセイドに入つた。いよゝ船の明朝ポートセイドに着するといふ前晚余輩は他の乗客と共に喫烟室に於て談話を交へて居た所へ、船のボーイが來て例になく一々乗客の國籍、生

國、年齢乃至父母の姓名から結婚の有無に至るまで詳細に之を一片紙に記入し去つた。余輩は日本出發の以前から埃及入國の甚だ困難なることを聞いて居たが、今此異例の取調に遭ふて愈明日の入國手續の頗る繁瑣あるべきを推想し、心中多少不安の念を抱かざるを得なかつたのである。翌日午前十時頃船は愈ポートセイドに着した。漸くにして警部船中に来り、此に下船すべき余輩を呼び、

税關構内に迄來らんことを求めた。余輩は匆々彼に伴はれ税關構内に至れば警吏余輩に對し其生國國籍、父母の姓名、乃至年齢や旅行の目的地等、前夜船中に認めたると同様のことを訊問し更らに余輩に何時頃入國の電報を發したかを問ふ。埃及入國のものは必らず電報を以て豫め其姓名並に入國の時日を知らし置くものと見へる。余輩は斯かることを知らなかつたから、勿論電報を發したこともない、若しありとすれば日本の英國大使館からでなくてはならぬ。警吏は入國者の名簿を頻りに調査して居たやうであるが、余輩の姓名は竟に見當らなかつたらしい。此に至つては日本政府の發行した而も公用の旅行免狀も、亦日本に於ける英國大使館や總領事館の裏書も、更らに何等の信用も置かれぬものと見へ、彼警吏と別室に於ける長官らしいものとの間に、數回の往復が始まつた。而して余輩も遂には其處に呼出されたが結局

其長官の意見で、豫め其通知がなくても入國の許可を與へて危険ないものと認められたらしいので新たに余輩の姓名を其名簿中に記入し一書簡を認め之を余輩に渡した。此間約二時間。先づ是れで入國の手續も終つたことかと思へば中々さうではない。入國の手續だけは漸く假卒業であるが、是れから警察に至つてカイロ入市の手續をしなければならぬ。警察は市の西端にあるといふので、日中案内者に伴はれ、徒歩で出掛けた。案内者は英語も能く解らず、始め近いかと聞いた時には、然りといつたから、徒歩で出掛けたもの、中々遠い殊に日中暑氣の最も烈しい時であるから、全身汗に塗れ、途で馬車を呼ばんとしても馬車の影もない。漸くにして警察に着き、例の手續を差出せば、此處でも又生國、國籍、姓名等前と同様のことを訊問し、又々例の下級警吏と上級者との間の往復が始まる、其間約一時間。漸くにして又一通

の書簡を認め之を渡し、再び前の税關構内に至り長官の署名を得れば手續完了すといふ。依つて前の途を引返し、税關に至れば、長官今不在なりといつたが、幸に前の警吏代つて署名し、又一片の書付を渡し、明朝汽車に乗る時之を停車場の係員に示せば宜しい、又カイロに着すれば直ちに市の警察に其到着を届出づべきことを注意す。

一時は頗る悲觀し、事餘りに面倒なれば残念ながら埃及旅行を放棄しやうかとも考へたが、手續も漸く無事終つたらしいので、劇かに空腹を感じ出した。當日は午前九時頃船中で朝食を取つたのみで、警察に引張られ通し、晝食を喫する暇もななく、彼是午後四時頃にもなつたのである。で早速ホテルに至り、人をして荷物を船中より取來らしめ、食事の後市内を散歩し、明日のカイロ行を夢想して安眠に就いた。

ポートセイドよりカイロ行の急行は午前八時十

五分と午後〇時半との二回しかない。で翌日は早朝支度をして發車二十分位前に荷物を携えて停車場に至り、例の書附を係員に示せば、係員は尙ほ是れにては不充分なり、軍隊よりの乗車許可證を要すといふ。そんな筈ではなかつたがと思ひ、昨日税關警吏のいつた通りを述べて抗議を申込んだが彼は頑として聞かぬ。已むを得ず其軍隊に行かんとすれば、軍隊は九時以後にあらざれば事務を執らぬといふ。到底八時の汽車には間に合はぬといつて、今更らホテルへ引返すのも馬鹿らしいので荷物は停車場に一時預とし、又々市内へ逆戻りカフェーに入つて九時の來るを俟つこととした。歐洲諸國では獨身者や下宿住ひのものが毎日朝食をカフェーで済ますことは珍らしくないから、早朝からカフェーの繁盛は一通りでないが、熱帯地方では必らずしも朝食を此處で済ます譯でもないのに、朝から珈琲の一小碗を口にして、唯茫然と

時間を消するものが頗る多い。余輩も今日は多忙の裡此閑日月を消する一人となつたのである。漸くにして十時近くにもなつたから、カフェーを出で、軍隊の事務室に行つた。軍隊の事務室といつても別に堂々たる建築がある譯ではない。停車場の附近空地に幾十となくテントを張り、其中に机や椅子を並べて、此に軍人軍吏が事務を執つて居るのである。其内部は風通りも悪く、暑苦しいこと夥しい。市内邊鄙の空地にも處々斯の如きテント張があつて、軍人は野獸の如く此に起臥して居るのを見受けたが、其れは何れも彼アラブの英政府に對し反抗の氣勢を擧げてから、之に備へる爲めの臨時の施設らしい、扱其テントに至り旅行免狀を示し軍隊の乗車許可を求むれば、又々生國、國籍、姓名等、例の如き訊問が始まり、一テントから他のテントへとの往復が繰返され、約一時間ばかりで漸く事済みとなつた。が午後の汽車には

まだ時間が早いので、市内の一料理店に入つて晝食を取り、〇時半の汽車に乗じ午後五時半頃漸く無事カイロの人となることを得た。英本國は元來執務の簡便敏捷を以て誇となす處であるのに、其植民地に來るや其不統一繁瑣なる實に言語に絶するのである。而して日本政府の發したる公用の、而も在日英國大使並びに總領事の裏書した旅行免狀も此に至つては半文錢に價せず、其所持者の何處の田夫野郎とも判らざるものと同一繁瑣の手續を經なければならぬといふのは、抑も何たる所以ぞ。不穩なるアラブ警備の爲め已むを得ざるに出づるのではあらうけれども、今少し黒白を判じて其手續を簡便にしても差支ないではなからうか。玉石混淆し多忙の旅客をして徒らに無用の時日を空費せしむるが如きは、余輩の甚だ遺憾とする所である。

二、カイロの滞在

余輩のカイロに入つたのは八月二十四日であるから、埃及の季節には尙ほ二三ヶ月早い、でホテルも八九分は客によつて充されて居たが、尙ほ何れも多少の餘裕を有する。而して其客の九分通りは皆軍人であつた。是れは大戦終了後彼等の歸國に際し旅行するものらしい。英吉利人の旅行好は之によつても其一斑を知ることが出来る。

カイロは元と埃及語 *Neh-eh* (戰場) より來り古代にあつては大金字塔に對しナイル河の東岸に位し、今のヘリオポリスの附近であつたといふ、而して希臘人は之を *Babylon* と稱した今其跡は全然荒廢し、處々殿堂の礎石の田野の間に存するを見るのみである。今「舊カイロ」と稱するのは、カイロ南方にあり、紀元後六百年代の中葉から創まつたものと稱するが、其後幾多の變遷を経、今や唯雜多の商店軒を並べて居るのである。新カイロは九百年代の中葉、埃及征服の後ゴールハルの開く所

といふが、其後マメリユークの爲め幾度も荒され現時の市街は近代の建築を以て充され、殆んど歐洲の都會を見るが如くで當年の面影は更らに認むべくもない。

ヘリオポリスにはカイロより馬車で約一時間半を要する。是れは日神オンの都と稱し、舊約書創世紀の中埃及王が夢判斷の爲めヨゼフを獄中より呼出し、彼をして説明せしめた所が其解説王の喜ぶ所となり、指環や頸飾や乃至衣服乘車等を給せられ、更らにオンの僧 *Potipherah* の女 *Asenath* を妻とし嫁せられたといふのが即ちそれである。此地は埃及最古の都會であつて、元と此には日神の殿堂あり、十二王朝の *Amenemhet* 一世之を再建し、其子 *Sosotis* 一世亦其前面に二個のオベリスクを立てたといふ。古代此殿堂附屬の僧侶は學識智慧を以て一世に鳴り、希臘時代に至つても彼史學の鼻祖ヘロドタスの埃及に來るや、此等の僧侶

と談論し、哲學者プラトーンも嘗ては其教義を學ぶが爲め、十有三年の間彼等と共に住したと傳へ、紀元前三世紀トレマイオス王の時希臘語を以て埃及史を編し、今に至る迄埃及史の最も重要な資料を給したる Manetho なるものも、亦此殿堂の僧侶であつたといふ。紀元前一世紀ストラボンの此

に來れる時には、都會は既に荒廢に歸して居たが殿堂は尙ほ存し、僧侶の住屋、プラトーンの室も親しく之を視るを得たともいふ。兎に角古代にあつては後に説くルキノールのアモン(日神)のそれに亞ぎ、埃及殿堂中最大最美のものと稱せられたのである。此歴史的背景に富んだ都會も殿堂も、今や一掃して荒野と變じ、處々城壁の殘壘の堆く地上に盛り上ると、ラムセス二世の彫文を有する花崗石塊の斷片の古代殿堂の所在を示すのみである。唯彼記念柱の獨り其間に屹立するのは、愈人をして寂聞の感を惹起さしむるに足るので

ある。柱は花崗石より成り高さ六十六尺ありといふ。四面同文を刻し、上に鷲鳥を鑿し、金字塔の形を冠せしむ。但斯の如きの柱は埃及には至る所に存するのであるから、特に珍とするには足らぬ。

ヘンオボリスの附近に一寒村あり、其名を *Mayyeh* と稱する、此に一のシカモア(埃及無菓樹)の老木があり、俗に之を呼んで「處女の木」ともいふ。傳説によれば基督の母、處女が其子を抱き、埃及に逃れ來た時、此樹の下に休息したといふので斯の名が起つたのである。が此樹は一六七二年以後に植えられたものともいふ。何れ彼支那の關外老子青牛を繫いだ樹と稱すものと同一種類のものであらう、今は四方柵を周らし、處々支柱を立て之を保護してある。我邦唐崎の松よりも遙かに小さく、錫蘭故都の菩提樹杯に比較すべくもない。尙ほ之を距ること數十歩にして一の泉がある。此邊一體の水は其色暗黒にして飲むべからざるもので

あるのに、如何なる故にか此泉のみは、多少黒ずんでは居るが、飲料に供し得るので、基督の爲す所であると傳ふ、是れも勿論我邦の大師が杖を挿して湧出た井といふの類であらう。

舊カイロの市街には何等余輩の興味を惹くべきものはない。此舊カイロの西ナイル河中にローダなる島があり、其南端が公園となり、其公園の南端に直径十六尺の方池あり。其中央に入稜柱が立つて居り而して柱には古代アラビヤの度盛をしてあり、是れが所謂 Nilometer なるもので、紀元後七一六年に始めて造られ、ナイル河水の高低を測量するものといふ。尙ほ舊カイロには Abu Sergeh と稱するコプト人の教會堂があり、處女及び其子の埃及に來るや此に一ヶ月滞留したといふのであるが、固より信ずるに足らぬ。又此建築は回教徒侵入以前のものとも稱するが、勿論其全部ではない、が併し此會堂はコプト基督教徒の古代埃及

ビザンツ式建築の一標本と見做されて居る。コプト人の教會は他にもないことはないが、(勿論何れも後世の修繕を経て居るのはいふ迄もない)先づ是れが其中の最も大なるものであらう。元來コプトといふのは、其語源に就き諸種の異説があり或は Jacobin からの轉訛であるともいふが、恐らく Aegyptios なる語がアラビヤ語の Kunt となり、それから今の語となつたものらしい。彼等の言語の中には元よりしてシリア語を混じて居たといふ、而して希臘時代以後希臘の文字を取り、之を以て其言語を書顯はすこととなり、當時のコプト文書なるもの今尙ほ少からずカイロ博物館等に保存されてある。彼等は羅馬時代に基督教徒となつたのであるが、シリアの Jacobus Baradaeus の教義を奉じ、羅馬正教徒からは Eutyochian heresy として排斥せられたものである。Eutyochus とはコンスタンチノーブルの基督教徒で、基督の肉體に於ては、

一切の人性は神性と融合すと説く所謂 monophysitism (單性説) を主張したものである。處女並びに聖者の信仰は此教會の最も特色とする所であるから、其會堂の正面には多くの聖者の像を掲げ信者は堂に入り先づ之を禮拜するのである。而して會堂は椅子の備なく、勤行の時には信者は皆立つて居るのである。又此宗派では斷食が最も嚴守され此時には雷に肉を食はざるのみならず、雞卵、脂肪、バタの類に至る迄一切之を口にするを得ざるものといふ。

新カイロは前にも述べた如く殆んど全部新建築より成り、古代遺跡の見るべきものはないが、此に吾人の最も興味を感じ、又世界の學界に誇るに足るものは、其埃及博物館である。余輩もカイロ滞在中には寸暇ある毎に此に出入して居たが、愈之を見れば愈其感興を惹起し、數千年前に於ける埃及の文化や、又其國民の生活狀態を想像し、其發

展の著しきに驚歎せざるを得なかつたのである。

埃及博物館とは今を去ること約六十年西曆一八五七年佛國の埃及學者 Aug. Mariette 氏の創立する所であり、現時の建築は一八九七より一九〇二年に亘り五百萬フランを投じて成れる所といふ。希臘羅馬式にして實に宏莊なる建築である。館は市の中央西端にあり、ナイル河に臨み、四方空地を存し、往來に便であつて且つ火災の憂のない適當な場所である。陳列は階上階下に分れ、古代埃及の藝術若くは日常生活に關する殆んど一切のものを蒐集する。が階下は主として古代の彫刻、繪畫、棺、碑、墓石をも併せを略時代別に整理し、階上には諸王を始め牛、猿、鰐魚等に至る迄の諸種の木乃伊より工藝裝飾品、(指環、腕環、頸飾等の金屬製造、ビラス文書乃至雜具等を陳列する。埃及の藝術に關しては余輩別に之を論じたいと思ふから、今は之を略するが、唯一言此に述べて置き

たいのは、埃及人が今より少くとも四五千年以前既に雄大なる藝術品を製作したこと、特に石材を取扱ふ術に於て恐らく世界に冠たるの伎倆を有して居たことである。石灰石の如き其質の稍柔いものは言ふを俟たず、古代の石棺は多く花崗石から出来て居るが極めて、巧に之を磨き、其面をして鏡の如くならしめ、細線を以て其四周内外に彫刻を施す、文字あり、人物あり、動物あり何れも精巧ならざるはない。木棺にも赤、緑、黄、黒、金等の顔料を以て諸種の繪畫を描いたのがあり。又時には全部漆を塗り、其上に金を盛上げ、諸種の像を顯はし出したものである。何れにしても彼等は美術並びに工藝の上驚くべき進歩の迹を示すに足るものである。

埃及博物館が創立以來僅かに數十年の時日を経過したに關はらず、既に斯の如き豊富なる材料を蒐集し得たのは固より諸種の原因がある。一には

埃及に於ては古代の墳墓が無數に存在し、副葬せられた器物の甚だ多いことにも由る。而して埃及は一歲中殆んど降雨のあらざる所であるが爲め此等の副葬品も何等かの理由によつて特に發掘敗壞せられたものゝ外、濕氣によつて腐蝕せらるゝ事なく、幾千年の間完全に地下に保存せられたからである。又一には創立以來の主宰者が、最も熱心に蒐集に盡力したること、埃及考古學部の斷えざる發掘とに由ることも勿論である。併しながら尙ほ此に一の看過すべからざる事實がある。而して是れは我邦博物館當局者杯の大に參考に資すべき事と思ふから、此に一言附記して置きたい。埃及でも私人の墳墓發掘は古來少からずある。我邦現時の制度では、此等私人の發掘品は無償で官に沒收するか、若くは僅かに名義上の價格を附して之を買上る事となり。其結果私に發掘したものは其發掘物の優秀なるもの程之を隱匿するに努め何時

しか其所在も判らなくなつて了ふ、是れは學術上の一大損失である、而して其弊は全く制度の宜しきを得ざるが爲めである。埃及では其全土を通じ三四十軒の博物館認定の骨董商がある。で苟くも骨董商にして認定のないものは信用の出來ないのである而して此認定の骨董商店に就いて或物品を求め、之を國外に送出すんとする時には、必ず博物館の證明を必要とする。博物館では一定の手數料を取つて、其物品の眞偽を鑑定し、其眞なるものは之を許可すると同時に、若し博物館藏品の内、之と類品のないやうな場合には、相當の價格を以て之を買上げ、外國輸出を禁止するのである。是れ一面には偽物を外國に輸出し埃及の美術工藝の眞價を損するを防ぐと同時に博物館の藏品をして益豊富ならしめ、民間私掘者の得たる優秀品も、悉く之を網羅して學術上の研究資料に供せしむるを得るのである。是れは頗る要領を得た方

法であると思ふ。我邦現時の制度の如き、偽物をして徒らに市場に跋扈せしめて顧みず、優秀品は反つて其所在を没せしむるが如き拙劣なるものと同目の論ではない。支那の如き大國にして而も統一しない國土では斯かる方法も到底實行は望み得られないが、我邦の如きでは大に參考に資すべきものではなからうか。

尙ほカイロに於てはアラビア博物館なるものがある。是れは *Fans Paula* の盡力により主としてカイロに存した古代のモスク、宮殿其他埃及の宮殿からして得たる物品を蒐集陳列したので、回教徒の墓石、木、石、乃至金屬彫刻、陶器硝子器、武器等苟くもアラビヤ人の製作に係る美術工藝に關するものは一切之を收める。勿論回教徒の製作に係るもののみであるから、時代に於ては前の埃及博物館に比すべくもない。其最も古代に成るものといへども、紀元後五六百年代を上らぬ。其中陶器模様

の如きは全然支那製のと異ならぬのがあり、又青磁の如きは恐らく支那から傳來したのではなからうかと思ふ。支那明代の青磁の如きは印度に於ても屢之を見、ジャワに於ても少からず存するのであるから、西方アラビア地方から埃及にまで渡來したことは、怪しむに足らぬ。武器の象嵌(鐵地に金銀を以て織巧なる象嵌をなしたるもの)乃至象牙寶石の象嵌細工の如きにも頗る優秀なるものがある。此等の技術に至つては今日といへども埃及のアラビア人は最も卓絶したる技巧を有する、此點に於ては印度人乃至は伊太利人の間に見るよりも一層勝れるが如く感ずる。刀劍の類の如きも(支那の匕首や左右より枝を出した三叉戟)往々支那の發掘と同一なるを見る。

尙ほアラビア博物館の階上にはケデーヴ圖書館なるものを設けてある。此圖書館はNehive Ismailなるものが、獨逸人の援助によつて、一八七〇年に

創立する所といふ。藏書總べて七萬五千五百卷、其内、寫本一萬二千卷、東洋書三萬二千卷と稱せらる。アラビア語の圖書は言ふ迄もなく、波斯、土耳其、シリアの圖書をも包含し、支那に於て出版したものもあるやうである。其陳列室には二種の支那書があり、一は明代の版であり、一は清朝のものであつた。何れも回教に關する出版物であることは勿論である。併しながら此圖書館に於て最も見るべき、又最も其誇とする所は、約六百年代以後に於ける各種のコーランの蒐輯である。コーランの收藏せらるゝもの總じて二千六百七十七卷といふが、中に就きバピラスの上に書寫せられた經典の如き最も珍とすべきであらう。之に次ぎてはパーチメント並びに大形の紙の上に書寫したのも少くない。其大なるものにあつては一頁三尺に四尺位のものあり、又其小なるに至つては一寸五分に二寸位の豆本もある。其行數も一頁三行、

五行、十行、十一行、十二行より小寫本には一頁四十餘行に至るものもある。其文字の周圍には諸種の彩色を以て裝飾を施すのみならず、一段の終毎に花形模様の極彩色のものを挿入したものである。又文字は墨書のもの普通であるが、中には處々朱青等の色を以て縁を彩るものもある。又全部の文字に墨色の細線を以て草勾を作り、中に金を塗つたものもある。其鮮麗にして贅澤なること到底佛教經典杯の比すべきではない。又支那の古鈔本にも其形の頗る大なるを見たが、此回教經典の如く大なるは余輩の未だ曾て知らざる所である。是れに由つて觀ても彼等が如何に其經典に對し、勞力と費用とを惜まなかつたか判る。又紙はバピラス色のもの普通であるが、恐らく初めは紙に書いたのもバピラス色に染出したこと、宛も支那日本の佛教經卷の貝葉の色に模したが如くであつたらう)次第に後世には白雁皮紙の如くにして純白の

ものを用ゐて居るが、時としては淡青紙を用ゐたものもある。波斯の書本も此には尠からず藏せられて居るが、何れも十五世紀を上らぬ。人物畫の如きは可なりに巧なるものもあるが、大體には印度モゴール朝の畫と殆んど同様なもので、斯の如きは印度にもないことはない、で甚しく珍とするには足らぬ、のみならず此に於ても古代波斯の畫に果して如何なるものであつたかを知るを得ないのを甚だ遺憾とする。アラビアの版畫には奏樂の圖等諸種風俗に關するものがあり、中には頗る見るに足るものもあり。何れも此等の書本には皮又は布の表紙(ケースをなす)を附し。是れにも亦繊細ではあるが、極めて緻密なる模様を描いてある。繪本は多く詩集若くは歴史的の著述であつて、經典には殆んど之を見ないといふ。是れはバイブルや佛教聖典と稍其趣を異にするのである。恐らく是れ其聖典を俗化するを恐れてゐらう。而して此

等繪本の製作は紀元後十四乃至十六世紀の頭を以つて殆んど其頂點に達したものと稱せらる。尙ほ此の圖書館内にはアラビアの古錢をも陳列してある。

其外カイロには地質學博物館なるものもあり、此には石器時代の遺物を多く蒐輯してあるが、其形狀並びに石質の如きは大抵我邦に於けるそれと大差ないやうである。又木の化石や埃及各地の鑛石、土壤等も蒐集せられてある。中にはリノセロスの一種なる *Arivotherium Zitelii* といふ巨獸や、正覺坊のやうなもの、完全なる骸骨等をも陳列してあるが、余輩は元來何等斯かる智識を有せぬので輕々に看過し去つた。又回数徒の殿堂や墳墓の類も尠からずカイロ附近にあるが、余輩は不幸にして斯類のものにも餘り興味を有せず、又印度に於ても既に多少之を見たから、唯其中最も美なるもの一を擇び、先づ一般旅行客の義務として

之を一見し、其餘は悉く之を省略した。其擇ばれた一といふのは即ち俗に *Alabaster Mosque* と稱するので、實は *Gami Mohammed Ali* である是れは全部ではないが、其主なる部分に埃及の大理石なるアラバスターを用ゐたるにより斯く名づくるのである。此殿堂はカイロ市の東南端なる小高き丘陵の上に、現埃及王朝の始祖モハメッド・アリが千八百廿四年に、希臘の建築家をコンスタンチノブルより聘し造らしめた所といふ。其建築材料としてアラバスターを用ゐたると、其周壁神凡等に諸種自然色の寶石を以て草花模様を彫めたることにより、美なることは美であるが、其形式は極めて簡單であり、唯方形の大廣間を 個廊下を以て連續せしめたに過ぎぬ。各室四周には又回廊あり、階あり上に昇ることも出来る、但其階上に昇れば其地の既に高きが爲め、近くはカイロ市を一望の下に瞰下すことを得、遠くは西方に當り、蜿々と

して長蛇の如く流去るナイルの河を踰え、毅然として天空に聳ゆる幾多のギゼイの金字塔を望み、風景最も佳である。殿堂の建築並びに裝飾に就いては、余輩は更らに一層壯麗優美なるものを、嘗て印度に於て見たこともあるから、左程感服しなかつたが、階上に於ける風景は、埃及にあらざれば到底見るを得ざる天下の絶景である。若し詩人をして特に月明の夜に之を見せしめたるならば、如何ばかりの感興の湧出することであらうと徒らに空想を抱いて徃徊去るに忍びなかつたのである。

此日余輩はドラゴーマン（ドラゴーマンとはアラビア語 Tugumân から來たので通譯のことである此地では通譯 guide といふのを非常に嫌ひ一般に斯く呼ぶのである）共に自働車を走らして來たのであるが、將さに殿堂の門に入らんとするや、銃劍を持って門前に駐屯したる英國の憲兵らしいものが、儼然として余の車を駐め、何處に又如何

なる目的を以て往くかと誰可した。恐らく是れはアラビア人不穩の兆ある時であるから、猥りに外人をして之に接せしめざるやう斯く嚴重に警戒するものと思ふ。通譯は馴れたもので、唯殿堂見物に行くのみである、何なら君も共に來らるべしといふ。乃ち彼憲兵一名余が車に同乗し來たが、余輩等は殿堂を見物して出づる迄車上に俟ち、歸路にはまた門外迄同乗し來り、彼此に下車したが其際數片の銅貨を握らせば彼唯々として受け知らざるものゝ如くに去つた。